

南山宗教文化研究所設立二十五周年 記念シンポジウム報告

岩本 明美
IWAMOTO Akemi

南山宗教文化研究所は、設立25周年を迎えた。その記念行事として、去る2000年3月24日に、「宗教研究と対話の精神 宗文研の歴史と今後の課題」と題するシンポジウムを開催した。そのシンポジウムは、南山宗教文化研究所編『宗教と宗教の〈あいだ〉』（風媒社、2000年3月24日）の出版記念祝賀会でもあった。『宗教と宗教の〈あいだ〉』は、宗文研の過去及び現在の20人のメンバーによる、宗教間の対話や関係に関する論文集であり、南山大学設立50周年及び南山宗教文化研究所設立25周年を記念して出版された。

シンポジウム及び懇親会には、過去の研究所員、事務員、研究員、研究所の設立に尽力された役員、日本国内の他の研究所の代表者の方々、そして宗文研が主催した過去のシンポジウムの参加者など、総勢60名をこえる来賓があった。

シンポジウムは、宗教文化研究所所長ジェームズ・ハイジックの挨拶で始まり、南山大学と宗文研との相互の協力関係が強調された。シンポジウムの第一部「宗文研の歴史を振り返って」では、15年間所長を務められたヤン・ヴァン・ブラフト氏と設立当初より長期間研究員を務められた石脇慶總氏に、両氏の体験談をもとに宗文研の生い立ちを振り返っていただいた。また聴衆のなかから数人の方々にも、宗文研との思い出を語っていただいた。

第一部終了後の休憩時間には、まず参加者全員で記念写真が撮影された。そして宗文研の今後の更なる発展と繁栄を祈念しつつ、研究所の前庭に記念植樹としてハナミズキが植えられた。

第二部「これからの宗教研究に期待されること 対話の精神をふまえて」では、東京から

宗教学者島蘭進東京大学教授と京都から宗教哲学者上田閑照京都大学名誉教授の両先生をお招きし、お話しいただいた。地理的にそして理論的に、東京の宗教研究へのアプローチと京都のそれとの橋渡しをすることは、宗文研が果たしてきた役割であり、今回はその両者が直接に対面する絶好の機会となった。

対話・悪・暴力 < 応用宗教学 > の課題」をテーマとした島蘭進氏のお話では、宗教に関係する悪と暴力の危険性、あるいはそれらに遭遇する可能性に気づく必要性が指摘された。また宗教研究者として判断し、人と社会に貢献しようとする必要性と危険性に留意しながら、「臨床宗教学」、「応用宗教学」、「実践宗教学」のようなタームの導入の検討が提案された。

一方、上田閑照氏からは、対話の中でしか対話できる人間は育たないこと、従って対話はし続けなければならないことが強調された。そして対話の理想形態として、「我は我ならずして我なり」という我によって本質的に不透明な他者を認め、さらにそのわからない他者を異文化（無限の豊かさ）として楽しむあり方が示唆された。会場では両先生の提言を受けた後、聴衆からのコメントや質問を交えながら、活発な議論が続いた。

シンポジウム終了後には、南山大学内の食堂「DA-GA-NE」で懇親会がもたれ、以下の方々からスピーチを賜った。澤木勝茂南山大学副学長、幸日出男NCC宗教研究所所長、長坂源一郎南山大学名誉教授（宗文研設立の功労者）、青山玄南山大学名誉教授（宗文研の初代研究所員）、成田良子氏（前事務員）、西村恵信花園大学副学長、赤池憲昭愛知学院大学教授。各氏のスピーチの後には、カメラ

ンでの用務のため今回参加することが叶わなかった、ヤン・スインゲドー前研究所員からのメッセージが読み上げられた。

われわれは今回の記念行事を通して、宗文研が25年にわたって築き上げてきたネットワークの重要性と、宗文研が直面している課題を再認識した。

(本研究所研究員)